

〈東京都立大島海洋国際高等学校 TEL:04992-4-0385 FAX:04992-4-1764〉

メールアドレス：[S8000531@section.metro.tokyo.jp](mailto:S8000531@section.metro.tokyo.jp)

HP アドレス：<http://www.osima-kaiyokokusai-h.metro.tokyo.jp/index.html>



## 宿泊防災訓練

11月21日大島町の防災の日に合わせて、今年度の宿泊防災訓練を実施しました。11月に実施するのは初めてでした。17時15分に中庭に集合して第三中学校へ大津波対策の避難訓練を実施しました。日没も早く、真暗い中の移動となりました。学校へ戻り、救急法の傷病者の保温・運搬について実習し、また、映像で東日本大震災の南三陸町の様子を振り返りました。非常食の喫食体験は本来白米だけでしたが、おかずがない状態では咽を通らないので、わかめご飯と合わせて喫食しました。1人前とされる食事の量では、高校生は耐えられず、クラッカーを追加しました。避難毛布が2枚配布されましたが、更に寒い時期では我慢できないであろうと感じました。



## 関東・東海地区生徒研究発表

11月13・14日に神奈川県横須賀市で関東・東海地区の水産海洋系高等学校の生徒研究発表会がありました。本校は、3年生の高野さんと松本さんが出席し、7月に実施した沖ノ鳥島観測について発表しました。関東東海地区には全部で11校の水産系高校があります。それぞれ各学校の課題について研究し発表します。中には課題研究の授業の中で校内選考の形をとり、選抜して出場してくる学校もあります。今回は入賞を逃しましたが、い

い経験ができたと感じました。

例年に比べ、表層にはっきりした躍層があり、表層と下層の水は混合しにくい状態であることがわかりました。

1月には沖ノ鳥島フォーラムでも発表します。



## 第2回鯨類調査

昨年6月に続き、11月29日と30日に大島近海における鯨類調査を企画しました。東京海洋大学鯨類学研究室の学生4名と本校生物部とボランティア部の生徒による共同調査です。11月28日の放課後に事前講義として、大島近海で見られる鯨類（マッコウクジラ、ザトウクジラなどの大型鯨類からイルカまで）とその見分け方や調査記録票の記入の仕方についてみっちり教わりました。そして迎えた29日、調査初日。あいにくの雨天と海況不良のため、出航をかなり迷いましたが、何とか出られる海況であったため、出航しました。しかし、出航して海況はかなり悪く、雨天でさらに波が3.0m以上とクジラの姿を確認できる状態ではないため、出航後1時間で帰港しました。その後、予報から調査を断念する決断をしました。この日に多くの生徒が午後から調査に参加する予定だったので、楽しみがなくなってしまいました。

翌日30日は早朝に強く風が吹いて出航が心配でしたが、出港予定の8時半ごろには海況が安定したため、予定通り出航しました。出航後45分くらいで、大島南部のメメズ浜沖付近で、イルカらしき姿が見えるということで船内が盛り上がりました。実際に、海面に白波が立ち、小魚がぴょんぴょん飛び跳ねている姿が見えました。それを追って、海面から跳躍する大型の動物も同時に見えました。しかし、残念ながらマグロ類の姿でした。ビデオ映像で、このような大型魚の捕食シーンは見たことがありますが、やはり本当の姿はそれ以上の迫力がありました！しばらく海面は生命の躍動感に溢れていましたが、落ち着いた頃、昨年の調査で鯨類を確認した大島の北東部に向けて出航しました。



予定のポイントでは、学生が持参した海中の鯨類の会話(?)を集音するマイクを利用して海中の音を何度も拾いましたが、どのポイントでも鯨類の声を聴くことはできませんでした。島の沿岸では、「テッポウエビ」の仲間が発する音を聞くことができました。当然、海面を注意深く見ていましたが、クジラの姿(ヒレ、噴気)は見ることができませんでした。

ポイントから波浮港までは、往路と違って、島の西側を通して最後まで鯨の姿を探し求めました。

30日は、考査前ということで参加希望生徒は少なかったのですが、



調査に参加してよかったといった声が聞けてほっとしました。

最後に、海洋大学の学生から今回、クジラの姿は見られなかったけれども、これはこれで、今の時期に鯨類は大島近海では見られないという貴重なデータであると説明を受けました。また、大島近海で鯨類に関する調査データが乏しいので、今後の調査でデータを集める価値はあると言われました。

大島近海では、研究者や船舶関係者の方によると、1―3月に多くザトウクジラなど大型鯨類がみられるということでした。次回は、この時期に改めて調査をすることを企画したいですね。

生物部顧問 倉澤 聡

## 進路講演会

12月13日に、株式会社国際水産技術開発の佐野幸輔氏に講演していただきました。会社は水産養殖の分野において真に地域住民の利益になるような技術開発や技術移転を行うことを目標として設立された会社です。国際協力機構(JICA)や海外漁業協力財団(OFCE)の委託を受け、日本の政府開発援助の一端を担われています。他の国を支援することは、日本の国益の獲得になるばかりでなく、人道的支援につながります。途上国にとって、水産業は生活に身近な生産活動であり、収入源として重要な位置を占めています。その分野で貢献することは、人々の生活にかかわる重要な支援となります。

ラオスでの淡水魚養殖技術の普及について経験談を話していただきました。以下に要

点をまとめます。青年海外協力隊に必要なものは、信頼関係の構築の大切さと、孤独に耐える心と向上心を持ち続けること。相手への敬意を持ち、現地に適応して、生活を楽しむ。物質的に日本と同じにはならないので、精神的に日本にいる時と同じような状態にすることが大切である。2年間という短い間であるので、その間に何をやった



か、帰国後の生活をどうするかも考えながら活動することが大切である。海外生活の楽しいところは仕事そのものが旅行のようなものになる点であり、また、コオロギやカタツムリといった昆虫食もエビやサザエと似ているので慣れれば快適であると気付く点などである。医療面で不安があったり、治安が悪かったり、交通事故や食の安全性への不安など、海外勤務のリスクもあるが、支援の体制もある。

海外で水産の技術者として働くためには危機管理や語学、資格取得を積極的に行い、「日々の努力」「人とのつながり」を忘れずに生活するようにアドバイスいただきました。

佐野様にはお忙しい中、来校いただきありがとうございました。大島南高校の卒業生の活躍の様子なども聞かせていただき、刺激になりました。

## 潜水部

11月24日(祝・月)に千葉県国際総合水泳場において第21回全日本スポーツダイビング室内選手権大会が行われ、潜水部19名が出場しました。

|                   |                    |     |    |       |           |
|-------------------|--------------------|-----|----|-------|-----------|
| 50mフリップパー男子       | 高校生の部              | 第1位 | 2年 | 平井 俊  | (文部科学大臣賞) |
| 50mフリップパー男子       | 高校生の部              | 第3位 | 2年 | 中原 風花 |           |
| 100mフリップパー男子      | 高校生の部              | 第3位 | 2年 | 青木 魁大 |           |
| 100mフリップパー女子      | 高校生の部              | 第3位 | 1年 | 富田 百華 |           |
| 200m潜泳            | 男子                 | 第6位 | 2年 | 石川 亮  |           |
| 400mフリップパーリレー男女混合 |                    | 第3位 |    |       |           |
|                   | 2年 酒匂 峻・平井 俊・中原 風花 |     | 1年 | 梅田 晶斗 |           |
| 50mフリップパー男子       | 総合の部 決勝            | 第5位 | 2年 | 平井 俊  |           |
| 50mフリップパー女子       | 総合の部 決勝            | 第3位 | 2年 | 中原 風花 |           |

## 校内釣り大会

12月7日、第2回釣り部主催 **Kaikoku Fishing Grand Prix** (校内釣り大会)が波浮港で行われました。昨年度の反省を活かして年内に開催しました。結果、昨年度よりも多くの生徒に参加してもらえ、釣果もカサゴやカワハギ等上々でした。日没時間が早いのが難点といえ、難点でしたが、昨年度以上に大会を盛り上げる事ができました。優勝は1年 磯貝遥大君でした。



## 卒業生のお話

3期生の活躍が大学の広報誌に掲載されました



( 拓殖大学国際学部 国際学科4年 ) **石川栄貴さん**  
**豊田悌助精励賞受賞**

入学直前に起きた東日本大震災が転機でした。元々、学生の間にしかできないことをやろうと考えていましたが、未曾有の大惨事を前に、今の自分にできることはこれだと思い拓殖大学ボランティアチーム(TVT)に参加しました。被災地では瓦礫の撤去や清掃作業などに参加。肉体的、精神的に過酷な状況が続き、終わりの見えない作業に心が折れそうになることもあり、それ

でも今できることをやり遂げようと、自らを奮い立たせました。復興支援ボランティアはTVTの活動として現在も継続的に行っています。

世界に目を向けるため、国際学部短期語学研修プログラム(フィリピン)や青年海外協力隊短期支援ボランティア(ラオス)にも参加しました。経済格差や貧困問題など理解しているつもりでしたが、実際に自分の目で見ることでしか感じられないことがたくさんあり、机上の理論を学んだだけでは人々の手助けは出来ないと痛感しました。

卒業後は広告代理店に就職します。様々な地域でボランティア活動に参加しましたが、地域の復興には世の中へのアピール力が必要だと思いました。現地の実情や観光案内、特産品の紹介など、地域復興につながる有益な情報をより多くの人に届けるためのノウハウを身に付け、将来は土石流災害から復興しつつある、ふるさとの伊豆大島に帰り、島の復興・観光PRに尽力したいです。